

巻 頭 言



ヤマハ技術会顧問
荒井昌三

私は10年先を考えるのが好きである。考えるとは大げさだが、想像するといったほうがよい。自分が生きてきた50有余年の時間を、現在を基点として左の時間軸に、そして今後の10年を右の軸にして今後の事象を想像する。21世紀の到来を私の時間軸に目盛ることのできる現時点はというと、世界史上パックス・ジャポニカと言えほどの国力を持った日本になっている。この蓄積された力が次の10年にあたえる社会変革の様相は、過去の100年、200年の変化に匹敵するものとなろう。

すこし前のことだが、「広島県・四川省経済交流会」にゲストスピーカーとして招かれた。四川省重慶市でヤマハ・モーターサイクルが製造されているという関係で。依頼された講演のテーマは「中国での経済活動の現状と展望」。展望については私の時間軸により、次のようなことを述べて反響をよんだ。

ヤマハが欧州ではじめて見本市に参加したのは、1964年のドイツ・ケルン市での欧州最大の二輪車見本市である。私は4台のヤマハ車をバンに積んで駐在地ロンドンからドーバー海峡を渡った。4台のヤマハ車はMF 2, YD 3, YDS 2, とTDI。当時は欧州車が見本市会場の主人公で、自転車は日本製が幅をきかせていた。

現在はどうか。モーターサイクルは日本車、自転車は台湾にその座をとられ、ケルン見本市の主役が代った。日本車が欧州車にとってかわり、市場を支配してすでに久しい。10年後のケルン見本市の主役はどうなっているだろうか。

ここで結論を書こうとしたら、技術会事務局から依頼された紙面が余りすぎるので、ちょっと横道にそれてみたい。世界史年表を開いて、私の時間軸表の背景においてみると、英国の富が強大だったビクトリア女王治世の19世紀中期以降の年表事項は、当然ながら英国を中心にしたものが列記されている。そして米国の富が英国を凌ぐようになった第一次大戦以降、10年前ぐらいまでは米国が年表を自己中心に書き加えていったようなものだ。パックス・ジャポニカで世界年表全体を編集するのは無理があるとしても、アジア年表は日本の経済力を反映したものとして作成されよう。21世紀はアジア時代と言われているが、私自身モーターサイクル事業にたずさわっていて、アジア時代の幕開けを肌で感じる。アジアは日本の強大な経済力による発展に共鳴して発展する。隣国中国への影響は最大のものになろう。そして発展する中国からの日本経済の構造変革への反作用も大きいものになろう。

ゲストスピーカーとして壇上で、四川省からの要人、広島県知事はじめ県の政財界の人達に、「中国のモーターサイクル産業界が、ヤマハをはじめとする日本の企業と、実質的な意味での平等互惠の精神で協力してゆくなら、10年後のケルン見本市における実用モーターサイクルは、重慶製その他の中国製が主流になることを予想する」と、私の展望をしめくくった。拍手がしばらく続いた。県知事はメモをとりながら頷いていた。